

支部長挨拶 広島国際大学教授 石丸紀興

一昨年7月に中国四国支部設立総会を開催し、昨年5月の通常総会で正式に設立が認められ、現在2年度目に入っておりますが、すでに活動は軌道に乗り様々な形態で展開されているといっております。これはひとえに会員皆様のご協力と、特に役員の方々のご尽力の賜と考えております。都市計画研究会では毎回長時間の発表とそれに続く討論時間が設けられて熱心な研究会となっておりますし、見学会やミニ研究会、研究発表会も開催されました。もちろん今後工夫して改善すべきことありましようが、まずは2年目段階までの活動として評価できる状況と思われます。



さて、現実の都市計画やまちづくりに目を向けますと取り組むべき課題は山積しており、すべてが必ずしもよい解決に向かってはいけません。住民参加のまちづくりには一定の成果がみられるものの、震災の教訓が次第に風化したり、合併問題に翻弄されたり(真にストックとなる取り組みはよいのですが)、都市計画関連予算の大幅な削減傾向にさらされたり、従来型の取り組みに再検討の必要性が迫られているといっております。さらに新たな課題が確実に出現する段階にあります。

そして、既にお気づきと思いますが、学会会員の高齢化が進み、若手の活動層の新規参入が芳しくないこと、常の活動拠点が支部管内の中で限られ、すべての会員に参加しやすいとはいえず、活動への参加者に偏りがあって、その広がりが進まないことなど問題を抱えています。

今年(2004年)11月13日(土)、14日(日)には広島国際大学呉キャンパスにおいて、第39回学術研究論文発表会が開催されます。既に実行委員会を立ち上げ、開催準備を始めているところですが、この機会に是非とも論文発表やワークショップ等への参加、期間中やその前後の各種催し企画への協力をよろしくお願ひします。

今や学会はその存在理由が問われており、特に社会的貢献という側面からの評価が避けられない状況となっております。とはいえ活動分野を広げたり、市民に呼びかけたりというだけでなく、長期的に真価が現れる活動をねばり強く進めていくことが要請されているのであろう。皆様の学会活動へのご参加を切に願ひする次第です。

平成15年度第1回見学会報告 見学地：サンポート高松(高松市) 2003.12.1 14:00~17:00

参加者：学会員等13人(中国地域：7人、四国地域5人、その他1人)

案内及び懇談参加者：四国地方整備局6人、香川県4人

<サンポート高松の見学>

サンポート高松は、瀬戸大橋の開通(宇高連絡船の廃止など)によって四国の玄関口としての位置づけが弱まり、地域経済の地盤沈下が懸念されることを主たる背景に、取り組まれた事業です。調査や計画は1983年度からはじまり、88年度に港湾改修事業、90年度に新都市拠点整備事業等が採択され、現在も香川県が全体を統括して事業を進めています。

事業区域は高松港とJR高松駅を含む約42ha(国鉄清算事業団用地22ha、既存市街地10ha、埋立10ha)であり、基盤整備には土地地区画整理事業等が導入されています。すでに整備された主な施設としては、旅客ターミナルビル、JR高松駅駅舎、駅前広場、高松港レストハウス、全日空ホテル、ペDESTリアンデッキがあり、さらに地上30階のシンボルタワー(文化、情報、コンベンション等の公共施設、賃貸オフィスなど)が2004年春にはオープンする予定です。

今後、国の合同庁舎の建設も計画されていますが、暫定活用の土地も残され、さらに既存の商業業務地との連携・共存などの課題もあります。

<四国地方整備局、香川県との懇談>

現地見学の後、サンポート高松のことに加え、都市計画区域マスタープランや都市計画の見直しについての説明を受け、懇談を行いました。

特に、香川県では新たな土地利用コントロール方策の導入を前提に、線引きの廃止(県庁所在地を含む区域では最初のケース)に向けて取り組まれており、注視していきたいと考えています。(文責：山下)



高層棟がシンボルタワー、左手が全日空ホテル、中央がターミナルビル



高松港、中央から右下方向に伸びるのは港と駅をつなぐペデ、屋根には太陽光発電のパネルが設置

平成15年度第1回研究会報告

「岡山市における官民協働の都市再生」

発表者 阿倍宏史(岡山大学理工学部教授)

岡山市の中心市街地では人口の減少、商業地の衰退、バス、路面電車の利用者の減少といった問題を抱えている。

そこで、官民が協力して以下のような構想を掲げ、中心市街地の再生を図ろうとしている事例の紹介であった。

- | |
|-----------------|
| 人と緑の都心1kmスクエア構想 |
| 路面電車環状化構想 |
| 文化公園都市構想 |
| 都心コーナー4拠点開発構想 |

構想の可能性を探るべく、県庁通りのトランジットモール化と市役所筋の車線を6車線から4車線に減らす交通実験を行った。

トランジットモールに関して周辺居住者、沿道事業所ともに道路の渋滞、自動車への影響はなしとする意見があるという意見を上回った。また、継続して行うことに関しては休日も含め、すべきとする意見が来街者、周辺住民で2/3を上回った反面、沿道事業所においては半数以下に留まった。

一方、交通実験に関しては、渋滞などの問題もあまりなく実験結果から路面電車延伸が可能と判断された。

市民意識では実験を行うことに対して、都心事業者、都心居住者、来街者とも肯定的、否定的な意見が半々であった。

路面電車の延伸計画については、地元有力者の発言力で進んだ経緯もあり、住民への説明不足に加え、予算の問題、環状道路の整備との関連もあり、実現性に向けて多くの課題がある。

今後の課題と展望としては、以下の5つの点があげられた。

- | |
|-----------------------------------|
| 都市回遊性の強化：路面電車の延伸・環状化と東西歩行導線の整備 |
| 歩行者モール導入によるにぎわいの核づくり
(岡山駅前、表町) |
| 交通ゾーンの導入による通過交通排除 |
| 駐車場の整理・適正配置 |
| 駐輪場の整備と放置自転車の撤去 |
| 都心バスターミナルと郊外路線の見直し、パーク＆ライドの拡大 |

上記の点については、まさに官民が協働して解決していかなければならないことだと感じた。

反面、質疑応答の中で林原シティの再開発の話も出たが路面電車の話も含め、市街地活性化には地元有力企業の力にも影響されることも感じた。

(文責：隅田)

「市民参加型「倉敷再生まちづくり計画」」

発表者 安永洋一郎(パシフィックコンサルタンツ(株))

倉敷市の中心部は、観光地としてにぎわいが定着し、チボリ公園からの流入客も多く、商品販売額等は落ち込んでおらず、商店主にはそれほどの危機感がないとのことである。このような中で、倉敷駅周辺連続立体交差事業を生かした駅南地区(旧市街地)の住民参加によるまちづくりビジョン作成に関わる報告である。

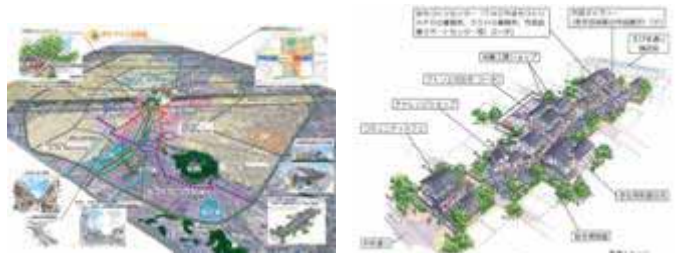
検討に当たって、まちづくり検討会(公募市民、商店街組合、関係交通機関、地元学生)を組織し、9回のワークショップを通じてまちづくり計画を作成した。計画案は、計画策定委員会(地元の学識メンバー中心)を通じて倉敷市長に答申された。

まちづくり検討会の提案ビジョン

- ・ 基本原則：歴史と文化を活かした美しいまちづくり
- ・ 重点地区の人口回復：住みたくなる住空間を創造するまちづくり
- ・ すぐできそうなことから始める活動

重点プロジェクト

- ・ 中央通りのパークウェイ化
- ・ 阿知町・本通商店街の再生
- ・ 町屋風賃貸集合住宅の整備
- ・ えびす通り拠点整備(芸術・起業の新たなにぎわい拠点)



まちづくり計画図

えびす通り拠点整備のイメージ

計画段階からの幅広い市民参加による都市再生への取り組み事例の紹介として、大変興味深いものであった。失礼な言い方であるが、ワークショップには非常に専門的な提案であり、会場からも「ワークショップが専門家主導のイメージがある。計画内容はコンサルの提案か」といったものもあった。実態は市民の中に大学関係者がおり、その人の案が入っているとのことであった。

業務としては単年度で終わることに対して、ワークショップ継続の必要性に対する指摘があり、その後、ネット上での活動が継続されているとの回答があり、大変興味をそそられた。また、一過性にしないための定期的な会合の開催や専門家による講演会等を実施しているとのことである。

また、倉敷の旧市街地は生活感がないが、市民の楽しみ場にならないかとの指摘があり、地元の芸大生が空き店舗を活用した作品展や町のライトアップなどを検討しているとのことであった。チャレンジショップへの大学生の出店は全国に事例がみられるようになってきたが、倉敷での若者参加の都市再生の取り組みに大いに期待したいところである。

(文責：安永、佐伯)

平成15年度 第2回研究会報告

「宇部市における中心市街地活性化の取り組み」

発表者 大畑 猛、植村氏(宇部市まちづくり推進課)

宇部市の中心部に位置する中央町商店街は、シャッター通り発祥の地とも言われている。報告は、宇部市の中心市街地の再生に向けて、土地区画整理事業、街路事業、優良建築物等整備事業等を総合的に組み合わせた中央町三丁目地区街中再生事業の紹介であった。

事業の特徴

- ・ 計画づくりから事業化まで、ワークショップ方式による官民協働のまちづくりを推進
- ・ 区画整理事業は面積 1.2ha、総事業費 21.5 億円、関係権利者 76 名、移転棟数 58 棟という市街地改造型の大事業
- ・ 景観ガイドライン(緩やかな街づくり協定)を定め、屋根等の形状、1階部分のセットバック、用途の立体分離(1階を店舗、2階以上を住居)等を誘導
- ・ 街区内に通路状の広場を整備

事業前の状況と完成予想模型



宇部市は、基幹産業の衰退、郊外部の豊富な開発余力等が、郊外化と都心の衰退に拍車をかけてきたことに対して、中心市街地の再生に向けて、都心居住というコンセプトでいち早く立ち上がった都市のひとつである。

当該事業は1.2ha、21億円という大事業であり、全国的にも注目されている。当該事業が、郊外化の波を押しとどめる布石となれるか、今後の動向に注目したい。

会場からの質問の中に、「大型店の郊外化が進む現状に対して、商業機能を誘導できるのか」、「シャッターどおりになったところをまた商店街として再生できるか」などの厳しい指摘もあった。市としても、商業以外の機能を検討したが具体的なものがない、現状では商業の再生が難しいことは重々承知しているが商店主の代が変われば新たな活力の目が出るかも知れない、といった戸惑いと、期待が交錯しているようである。いずれにしても、中心市街地再生の勇氣ある第一歩は今踏み出したばかりである。

最後に、石丸支部長が、「郊外化を放置すればいずれ郊外も空洞化し、都市全体が空洞化する」との警告を寄せられたのが大変印象的であった。

(文責：佐伯)

「非線引き都市のコンパクトな都市づくりを考える」

発表者 鶴 心治(山口大学工学部助教授)

山口県は、人口10万人以上の都市である宇部市と山口市が旧未線引き都市であり、皮肉なことにこの2都市は人口増加傾向を維持(宇部市はh7~12で減少に転じた)するなど、都市としての活力を何とか維持している。山口市は、線引き都市である防府市との合併を進めている。発表は、2つの未線引き都市の都市構造の特徴と、12年度の都市計画法の改正を踏まえた防府市と山口市の法運用に見るコンパクトシティーの取り組みと今後の課題を中心としたものであった。

問題提起(概要)

- ・ 山口県は県土1時間構想を掲げ、幹線道路網を整備。結果的に郊外化が進行した。
- ・ 昭和50年~平成7年の開発行為は、山口市は白地地域に4割、宇部市は同16%。宇部市は用途地域内の人口密度が低く、開発を吸収
- ・ 山口市の白地地域の開発は、線引き都市である防府市からの転入も見られ、防府市サイドの不満を誘発している。
- ・ 山口市と防府市の合併(小郡町、阿知須町を加えた2市2町)に際して、山口市は白地地域の建ぺい率/容積率(現行70%/400%)を(50ないし60%/100ないし200%)に見直し検討中。
- ・ 防府市は、調整区域の開発許可基準(都市計画法34条8の3)を県条例が定める最もゆるい基準を採用する予定で、両市のバランスを取ろうとしている。
- ・ コンパクトシティーには、線引き制度の運用による市街地密度を高める方向と、一定密度の複数の拠点を配置し、それをネットワークすることにより生活密度を高める方向の2つがある。山口県の場合は、市町村合併等の動向から、後者を選択するケースが多く、その具現化は難題である。

都市計画法の改正により、線引き制度が選択性になったことや、開発許可の基準が県条例にゆだねられたことを踏まえた、制度運用の試案として、非常にタイムリーな話題提供であった。

山口県の場合、幹線道路網が充実し、この結果、郊外居住、郊外店舗の立地等が進み、中心市街地が衰退したという。また、未線引きという既得権や都市計画税をかけてきた背景等から、合併に当たって簡単に都市計画の方向転換ができない中、条例の運用等により都市間の不公平感を払拭しようと試行錯誤している。しかし、その方向はコンパクトシティーに逆行するもののように感じたのは筆者だけであろうか。宇部市等で取り組もうとしているネットワーク型コンパクトシティーの概念について、また詳しくお聞きかせいただける機会を楽しみにしている。

なお、鶴氏は、山大学部、山口県、山口県建築士会等により作られた

「山口まちづくり研究所」の宇部まちなか研究室も勤めている。

(文責：佐伯)



会員紹介

<私のいまの関心事>

熊谷昌彦(くまがい まさひこ)



米子工業高等専門学校建築学科教授
1952年福岡県生まれ/広島大学卒業/
東京工業大学大学院修了/
地域施設計画/工学博士

「ヒトの発達過程」と「環境」の関連に関心がある。視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚の五感を含め身体感覚を触発する環境とは何かに興味がある。現在は、視覚偏重の時代であり、聴覚が次にくる。触覚・嗅覚・味覚が軽んじられている。視覚・聴覚が支配する環境は、快いが、リアリティがなく、自己確認のない不安な状況をつくりだしている。漫画的に描くと、環境をヒト科動物園、そこに住まう動物をヒトと捉えたとき、ヒトが正常な感覚をもって発達するにはどのような環境であつたらいいのかとの問いかけともいえる。

この視点から、日本の都市を眺めると、森林を切り倒し、海岸線をなくし高速道路と鉄道とダムをつくり続けたため、全体的には悲惨な状況ではないかと思う。

それでは、「良い建築や良い都市計画って何?」と尋ねられても、答は様でない。建築や都市は、いまや、社会的に広く認知されたある理想的なマスタープランに沿ってつくられるのではなくて、各地域が知恵を出し合いながら、自ら価値判断を行うプランニングのプロセスを経て、つくり続けるものであると思う。

したがって、研究は、地域、プランニング、プロセス、合理的な価値判断、計画の評価、公共性、環境、認知と知覚、身体性等の言葉が、キーワードとなる。ここでは、現在、私が指向している研究課題を5つあげる。研究対象は、現在のところ学校・図書館・病院・社会福祉施設・環境共生集合住宅・鳥取県西部地震・リニューアル・小都市の都市計画等である。

- (1) 都市計画や地域施設計画決定過程の合理性に関する研究
- (2) 地域施設の住民評価のフィードバックシステムに関する研究
- (3) コンサルタント・設計者選定過程における公平・公開性の確保に関する研究
- (4) 地域の維持・再生における公的支援の意味と課題に関する研究
- (5) 設計・計画学習支援のための環境形成に関する研究

学校図書館と町立図書館の複合化計画を小学生児童とのワークショップを通じて行い、児童から評価を受けている様子。(2002年度米子高専5年生設計授業の



事例)

<高知工科大学工学部社会システム工学科まちづくり研究室>

大谷 英人(おおたに ひでひと)

私たちの研究室では、『まちづくり計画学(都市計画・農山漁村計画・建築計画)』を研究しています。主な研究テーマは「住民を主体としたまちづくりの計画論的・実践論的研究」です。

「まちづくり計画学」と「住民参画」

『まちづくり計画学』とは、単に物的な“もの”を造るだけではないし、“もの”の中で、「どのような暮らしがあるか」、「どのような暮らしをつくるのか」を考えることです。そして『まちづくり』とは、そこに住んでいる人々が自分自身の問題として「まち」に関わり、自分たちの手で未来に向けて、ハードだけでなくソフトを含むトータルな住みよい「まち」(環境)を「つくってゆこう」とするアクション(行為)であるといえます。

『まちづくり』への住民の参加が叫ばれてから、ずいぶんの年月が経ちました。しかも現在、「まちづくりの主体は住民である」という一般的な考え方に、異議をはさむ人は誰もいません。

しかし、本当に住民が主体となって物事が決められている事例は、残念ながら日本では極めて少なく、むしろ、計画・事業が『突然に降ってわいたり、突然に押し付けられたり』しているのが現状です。

市民参画は社会的要請ですが、日本の場合、アメリカやイギリス、ドイツなど住民参加(参画)が進んでいる諸国と比較して、住民参加手続きが法律上極めて限定的な範囲にとどまっていること、日本の行政は住民参加の経験の蓄積の機会が非常に少なく、住民参加(参画)を成功に導く様々な方法や技術の開発がなおざりにされてきたからです。

「まちづくりワークショップ」の実践

そこで私たちの研究室では、『まちづくりワークショップ(「まちWS」)』と呼ばれる方法で『まちづくり』における市民参画を進めています。この手法は、街に住む人々が自分たちの環境を良くしたり、新しい環境をつくる時、皆で知恵を集めて考える方法です。この「まちWS」では、誰もがプログラムに従い、道具を使いながら、自分の住む身近な環境への提案をまとめることができます。

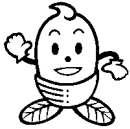
またこの方法は、住民がグループで討議したり、作業したりしながらゲーム感覚で『まちづくりマインド』を育てていくことができます。今後も『住民参画のまちづくり』の充実のために、これらの方法と実践と、その蓄積を図っていきたく考えています。



ワークショップに向けての準備の様子

まちづくり研究室の構成

まちづくり研究室は、現在、大学院生5名、学部4年生6名、3年生7名が在籍しています。私は、研究室の学生が、常に「まちづくりの現場での実践」をとおして研究・学習が行えるように心がけています。



上勝環境デザイン研究会 棚田セミナー報告

行事名：上勝環境デザイン研究会
第3回記念セミナー
テーマ：棚田保全活動の現状と展望
講師：中島峰広(早稲田大学・教授)
主催：上勝環境デザイン研究会
日時：平成15年7月5日(土)13:30~16:30
場所：上勝町ふれあいセンター
参加人数：28名

はじめに

『上勝環境デザイン研究会』では、「過疎地における知的情報交流の活性化」を目的に、地域や環境デザインなどに関するセミナーを定期的で開催しています。今回は、2003年7月5日に開かれた、早稲田大学教授・中島峰広氏をお迎えした記念セミナー「棚田保全活動の現状と展望」について報告します。

セミナー開催趣旨

全国棚田100選に選ばれている【上勝町・榎原の棚田】。昨年の第8回全国棚田サミット(千葉・鴨川)で、その曲線型整備が全国で紹介された【上勝町・八重地の棚田】。昨年、棚田コンサートの会場となった【上勝町・一宇の棚田】。その他、【神田の棚田】【横峰の棚田】【府殿の棚田】【野尻の棚田】など、上勝町には多くの棚田が存在しています。高齢化、過疎化、少子化、木材価格の低迷など、多くの複合的課題に直面する中で、上勝町の棚田も、少しずつ減少してきました。

第3回記念セミナーでは、『日本の棚田-保全への取り組み』の著者でもあり、日本の棚田保全活動の第1人者である中島峰広先生をお迎えして、棚田保全活動について議論しました。



写真1 上勝町・榎原の棚田(全国棚田百選)

中島先生講演概要 13:30~15:00

中島先生からは、棚田保全の仕組み、棚田オーナー制度今後の展望、の観点から講演をいただきました。



写真2 講師・中島峰広氏

その中で、全国の棚田保全の取り組みを幾つかの類型に分けて解説していただきました。

すなわち、オーナーの来訪回数・農園面積の大きさの視点より、農業体験・交流型 農業体験・飯米確保型 作業参加・交流型 就農・交流型 保全支援型、の5つに類型化して説明いただきました。

今後の展望として、平成16年度で終了する中山間地域等直接支払制度がどのように見直しされるのか、「農業の多面的機能を最大限に評価した環境支払いの導入」への期待と棚田オーナー制度の強化策としての「棚田協力隊(棚田ネットワーク)」の取り組みなどについて話題提供していただきました。

講師~参加者間の意見交換 15:00~16:30

中島先生の講演会の終了の後、ワークショップ方式により、講師~参加者間の意見交換を行いました。

【質問・意見：棚田と景観】

- ・ 「棚田の景観保全と生産性を追求したほ場整備とどちらを優先すべきか」
- ・ 「稲作か景観か・・・棚田を残す場合にどういう風にして残すのが良いのか」他

(セミナー事務局)景観と生産性の優先度については、八重地の棚田整備に携わった担当者の意見や中島先生の経験等を踏まえると、これという答えはなく、やはり永遠のテーマのようです。



写真3 ワークショップ方式による意見交換

【質問・意見：生態系との関連】

- ・ 「棚田のほ場整備における生態系への配慮について」
- ・ 「八重地の棚田のように曲線を生かしたほ場整備と生態系の関係は」他

【質問・意見：オーナー制度・棚田保全の仕掛け】

- ・ 「オーナー制度の仕掛けづくりでユニークなものは」
 - ・ 「オーナー制度成立の距離的な条件は」
 - ・ 「仕掛け作りで感動したものは」ほか
- (中島氏)オーナー制度が成立するには、あまり遠すぎないことが重要なポイントです。車で2時間程度の距離といわれています。また、活動に参加するときは、「棚田を保全してやろう」という気持ちは捨てて、まずは「棚田で遊ぶ」ぐらいの感覚で気軽に来ることが大切です。

保全に貢献した田 = 1万円 / 10a などと考えられているようです。今後は、こうした農業の多面的機能の評価をさらに徹底させる必要があります。

【質問・意見 : 棚田米(ブランド米)】

・ 「棚田米はおいしいというが、どれくらいブランド価値があるのか。どれくらい高く売れるのか」
(中島氏)きれいな水で作った、天日乾燥、水車で精米したもの、などいろいろな付加価値をつけて販売されており、最近はそれを評価する消費者も増えてきました。値段については地域によって様々ですが、ブランドの価値は十分あるといえます。

【質問・意見 : 環境デカップリング】

・ 「環境デカップリングの導入に当たり、指定動物の基準はあるのか」
・ 「今後は環境支払いが非常に重要になると思う。しかし、国民が納得できる支払額を決めるのが難しいのではないか」
(中島氏)指定動物の多い田 = 1万円 / 10a、指定植物 = 1万円 / 10a、作土を保全した田 = 5万円 / 10a、水質

【質問・意見 : その他】

・ 「棚田の研究者: 棚田の研究が随分すすんでいるようだが、いつ頃からどういう分野の方が多いのか」
・ 「棚田サミットは最近都市化しているような気がする、しかし第1回の高知県檜原町の原点に戻って上勝町でも開催できるか」
(中島氏)平成11年8月、棚田の歴史やそれを取り巻く民俗、地理的環境などに関心のある歴史・民族学者、生態学や経済学、農業土壌学や農政学者のほか、棚田保全活動を行う人達も参加した「棚田学会」が結成されていますが、まだまだ活動は始まったばかりです。
また、上勝町でもサミット参加者の宿泊先の確保について工夫すれば、十分可能性があります。本日のセミナーをきっかけに上勝町でもオーナー制度ができれば、さらに追い風になるでしょう。あとは行政のあと押しがあれば実現すると思います。



写真 4 棚田セミナー(全景)

ご連絡

事務局より今後の支部行事のご連絡をさせていただきます。このニュースレターが届いた直後からの支部行事をお知らせ致します。

見学会のご案内

日 時:平成16年1月17日(土)13:30~15:00
テーマ:「CATV等の情報メディアによるまちづくり」
講 師:高橋孝之(株)サテライトコミュニケーションズ
ネットワーク代表取締役
会 場:(社)中国地方総合研究センター 会議室

第4回都市計画研究会のご案内

日 時:1月17日(土)15:15~18:00
テーマ:中心市街地の再生について
コーディネーター:間野博(広島県立大学)
発表者:佐藤俊雄((社)中国地方総合研究センター)
松波龍一(株)松波計画事務所
加藤文教(株)ヒロコン
塚本俊明(株)都市環境研究所
佐伯達郎(復建調査設計(株))
会 場:(社)中国地方総合研究センター 会議室

都市計画シンポジウム企画

日 時:3月27日(土)午後より
テーマ:“都市計画はこれからどこへ行くのか?”(予定)
日本建築学会中国支部都市計画委員会、都市住宅学会中国四国支部と共催の予定です。
詳細は、実行委員会で協議してもらい、それを後日ご案内致します。

編集後記

このたび、都市計画学会中国四国支部の会員相互の交流のきっかけになればとの思いから、支部ニュースを発行することといたしました。年4回のペースで、活動報告や会員紹介や委員照会等を随時行なう予定です。できるだけタイムリーな話題をご提供できるよう心がけてまいります。支部ニュースが会員の皆様の交流促進や意識啓発のきっかけになれば、編集委員一同これほどうれしいことはありません。

紙面は、皆様からご意見、ご協力をいただきながら徐々に充実して行きたいと考えています。皆様からの熱いメッセージをお待ちしています。編集委員会 ML(toshimail@egroups.co.jp)までお願いいたします。

本年が皆様の飛躍の年となりますように。(編集長 佐伯)

編集委員:佐伯達郎(編集長)、佐藤俊雄、隅田誠、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也